



明日から使える！精神科薬物療法の臨床 Hack

堀 輝, 嶽北佳輝 編
新興医学出版社

2025年7月 200頁
本体価格 3,500円+税

書店などでふと目にしたら、ポップな装丁とキャッチーなタイトルから「精神科初学者向けの軽い読み物かも」と思われるかもしれない。しかし、それは良い意味で裏切られる。本書は、その外見からは想像できないほど、本格的かつ実践的な臨床知に満ちている。実際にページを開いてみると、精神科薬物療法のエッセンスが惜しげもなく詰め込まれており、単なる「Hack（裏技や工夫）」集ではないことにすぐに気づく。200頁足らずの本書は、成書にありがちな歴史や薬理機序の詳細などは最小限に圧縮されている一方で、臨床家が今知りたい情報が過不足なく整理され、全編にわたって平易で読みやすい文章で統一されているため、あっという間に読了することができた。本書は日本臨床精神神経薬理学会で毎回立ち見が出るほどの大盛況のシンポジウムが下敷きになっているとのことだが、その熱気と臨場感を余すことなく伝えている。

本書は、抗精神病薬、抗うつ薬、リチウム、抗てんかん薬、睡眠薬、抗不安薬、ADHD 治療薬、認知症治療薬など11章で構成されており、各章の後にはそれぞれ最新のトピックスがコラム形式で掲載されている。このコラムがめっぽう面白い。例えば、「向精神薬の服用回数について」や「抗認知症薬は中止するもの？」などの最近の話題から、「第一世代抗精神病薬が有用なときとは？」「三環系抗うつ薬の活かし方」「トラゾドン、ミアンセリン、ヒドロキシジンの使いどころ」という温故知新な知見まで含まれるといった具合で、学会や研究会の情報交換会、または臨床の合間の雑談などで交わされる内容を立ち聞きしているよ

うなわくわく感がある。各章は現場経験豊かな臨床家たちによって執筆されており、標準的治療やガイドラインをふまえつつ、海外のエビデンスや適応外使用、さらには各執筆者の経験的な印象についても積極的に紹介していることも本書のユニークな特徴であり、実際の診療でしばしば直面するが成書では明記されない“グレーゾーン”への対応が多く語られている。特に印象的なのは、薬物療法の技術論にとどまらず、「患者との関係性」や「診察室での言葉の選び方」にまで踏み込んでいる点である。精神科における薬物療法が“ただ薬を出す”行為ではなく、診療のなかで構築される精神療法的プロセスの一部であることが強調されているように評者には感じられ、編者と執筆者の熱い思いが各章ごとに記載される“架空症例”に集約されている。また、「自分のやり方を紹介するが、あくまで一例」といったスタンスの語り口が多く、読者に押しつけがましさを感じさせない点も好ましい。若手医師にとっては「先輩の後ろ姿を覗き見る」ような感覚で読める一方で、ベテランにとっても自身の診療スタイルを再検討する機会となる。

もちろん、本書は網羅的な薬理学の教科書ではないし、厳密なエビデンスレビューを目的としたものでもない。しかし、実臨床における「意思決定のリアリティ」に対してこれだけ真摯に向き合った書籍は貴重である。精神科薬物療法においては、マニュアル通りに進まない症例や、患者個人の背景をどう織り込むかといった“正解のない判断”が問われる場面が多い。本書の内容は、単なる薬剤の使い方ではなく、患者一人ひとりと向き合うなかで得られた深い洞察や試行錯誤の積み重ねの、まさに“生きた知”であり、そうした判断に迷う場面での「考え方の軸や拠り所」を与えてくれる。

本書は精神科初学者にとっての導入書でありながら、熟練者にとっては「共感と再発見の書」でもある。その親しみやすい外観の奥には、臨床の現場で磨かれた知恵と工夫が詰まっており、精神科診療に携わるすべての医療者にとって、手元に置いておきたい“明日から”の指針となる一冊である。

(國井泰人)